

ICT活用・遠隔教育センターの生涯学習への貢献



放送大学ICT活用・遠隔教育センター センター長
加藤 浩

これまで本誌は独立行政法人メディア教育開発センター（以下NIME）が編集・発行していたが、NIMEは昨年度末で廃止となり、主要業務が放送大学ICT活用・遠隔教育センターに移管された。それに伴い、本誌の刊行もまた同センターに移管されることとなった。つまり、本号が新センターから発行する記念すべき第1号となる。

これまでNIMEは、高等教育機関を対象に、様々なメディアを高度に利用して行う教育に関する事業を展開してきた経緯があるが、NIMEの廃止にあたっては「生涯学習社会の形成の観点から（中略）ICT活用教育を含めたメディア教育の振興に努めること」という附帯決議がついた。つまり、当センターにおいては、活動の範囲がこれまでの高等教育から生涯学習へと広がったのである。

もともと、放送大学にはその目的の中に「（前略）広く生涯学習の要望に応えること（放送大学学則第1章第1節第1条）」という文言があり、当センターも放送大学の一員として、その一翼を担うことになる。

このような情勢の変化から、本号の特集テーマを「生涯学習におけるICT活用の現在と将来」と決定した理由のひとつには、当センターが生涯教育という新天地に向けて船出をしたことを内外に対してアピールするというねらいがあった。

さて、インターネットを中心とする情報通信技術（ICT）が生涯学習に、どのように貢献できるかという点であるが、それには大別して3つあるだろう。

第1は生涯学習に関する情報提供の手段である。図1は生涯学習のリソースを学術性の高低と教育目的の2軸で分類したものである。一般的に言って、下部の個人の知識・技能を高める目的の講座・講習会の方は、すでに情報提供手段がよく整備されており、インターネットから容易に情報を得たり、受講申し込みをしたりできるようになっている。これらには有料のリソースが多いため、それを紹介するというビジネスモデルが成立しやすいと考えられる。

これに対して、上部に位置する、NPO・NGOが主催するような、個人の教養のためというよりは教育を通して社会を変革したいというような目的の講座については、多くの場合、それを主催・共催する団体のホームページを通して告知される程度であり、なかなかその情報を得るのが難しい状況である。その理由の一つは、これらの多くが非営利目的で、無償か必要経費程度で参加できるものが多く、ビジネスとして成立しにくいからであろう。

当センターでは、NIME時代に開発したNIME-gladを継承してオープンコースウェアや国際連携コンソーシアムGLOBEに基づく学習コンテンツの検索サービスを提供している。しかし、現在のところ、それは高等教育分野が中心で、図1に示すような多岐にわたる生涯学習リソースに関する情報を包括的に収集し、検索の用

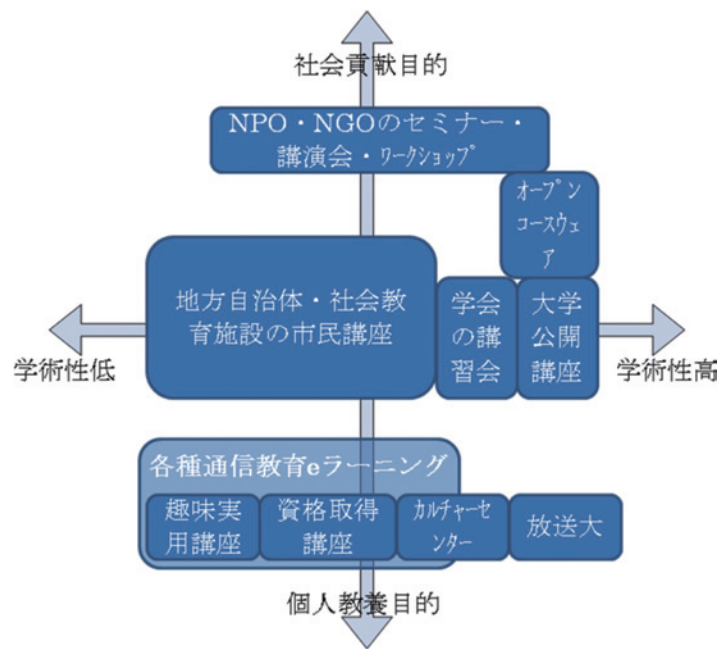


図1 生涯教育学習リソース

に供しているわけではない。今後、当センターのような半ば公的な機関がそういったサービスに乗り出す必要があるのではないだろうかと考えている。

第2は遠隔教育の手段としてである。生涯学習の潜在的学習者の背景は、学校教育と比較にならないほど多岐にわたる。そのため、地理的要因、時間的要因、経済的要因、身体的要因などさまざまな理由によって、学習意欲はあるのにその機会に恵まれない人たちが多数いる。この問題に対してICTが貢献できることは少なくない。インターネットを活用することで、テレビ会議システムにより遠隔地で行われている講義にリアルタイムに参加することもできるし、学習管理システム（LMS）で文字や写真や動画で作った教材や講義のビデオ映像を、好きな時間に自宅や職場から視聴して学習することもできる。このようにICTによって、様々な事情を抱えた人々に新たな学習機会を提供することができる。

当センターでは、これまでもUPO-NETやCLADというシステムを通して、数学・英語などのリメディアル教材やコミュニケーション力養成や情緒力開発などのeラーニング・コースを開発・提供してきた。今後は、より広範な教材を開発するとともに、世の中に埋もれているeラーニング教材・素材を世界的に共有・流通する仕組みを整えていきたいと考えている。

第3はコミュニティ構築の手段としてである。近年、ブログ、Twitter、ソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）などが発展し、若者を中心にユーザ層を広げている。例えば、わが国のSNSの最大手であるmixiには2009年7月には1,740万人を超えるユーザ登録があり、大小様々のおびただしい数のヴァーチャル・コミュニティができています。興味深いのはヴァーチャル・コミュニティのメンバーが、オフ会と称して自主的に集会を催し、対面のリアルなコミュニティへと拡張していつている例が多数あるということである。

このような誰でも入れる巨大SNSがある一方、「あみっぴい（虎岩，2008）」のような地域SNSは、対面したことのある人だけにメンバーを制限することで、顔の見える人間関係を構築し、地域の活性化や世代間交流に成功している。これらの事例はSNSのようなインターネットのサービスが、単にインターネット上のヴァーチャ

ャルなコミュニティを構築するだけでなく、やりようによっては十分に実生活のリアルなコミュニティと関係を作りうることを示している。

将来的には、当センターでも、このようなしくみを活用して、ネット上にヴァーチャルな生涯学習コミュニティを構築して、さらに、それを足がかりにして学習の場でのリアルな交流や新しい学習機会を生み出すことができたらよいと考えている。

とはいうものの、当センターも発足からまだ半年しかたっており、NIMEから継承した高等教育機関のICT活用教育振興事業が引き続き主要業務となっていることもあり、生涯学習への取り組みも、まだ緒についたばかりである。さらに、多くのセンター教員にとっても、生涯教育は未知の分野であり、まだまだ知識も経験も十分とはいえない。そういう意味で、当センターが本特集を通して学ぶべきことは多い。この機会に、この分野の最前線で活躍されている方々が執筆した論文を通して、生涯教育に関する見識を深めたい。

引用文献

虎岩雅明（2008）. 地域SNSあみっぴいでの顔が見える関係作りと世代間交流がもたらす可能性 日本教育工学会第24回全国大会講演論文集, 9-10.

2009年12月1日